

かなりの上昇と農民の消費水準の或るていどの向上があったとおもう。しかし日本の場合これをロストウ式に Pre-conditions とすることには反対であり、同時的な発展と解すべきだと考えている。何れにしろ日本の読者の関心をよぶ点とおもう。

第10章以下第16章まではいわば要素別接近に関する報告がおさめられている。人口、技術(ライベンスティン)、農業(ポセラップ、バルホース)、資本形成(ケアンクローズ)、社会施設資本(クートナー)、外国資本(ペリル)である。ここでも叙述の視点、ロストウ理論との関係は各章かなりまちまちだ。純理論的接近が技術や資本について、しかも別々に行なわれている一方、農業や外国資本については制度的、歴史的事実に重点がおかれている。ロストウ理論の検討という意味ではかなりピンぼけの感もある。たとえば社会施設資本という特殊概念は純理論的には必要がないというクートナーの結論は、この書のねらいからどううけとればいいのか。また農業を国際的視野から論じたポセラップは話を「農業改革」Agrarian Reform に集中し東南アジアの農業政策論にまで及んでいる。農業経済の分野での一つの有力な見解の代表ではあるとおもうが、ロストウの Pre-conditions 概念が無条件にうけいれられていては理論的な弱さをまぬがれまい。

さきにふれたソローは論文をかいていない。しかし読者は最終セッションの討論記録(p. 468 以下)にその骨子を見ることができる。これは理論家の「外生的」批判として代表的でさきにふれたゲルシェンクロンの「内生的」批判と対照的だから一言ふれよう。経済成長のモデル分析は明確に区別すべき3つの要素からなっていると彼はいう。人間行動のルール、パラメーターそして初期条件 initial conditions これである。ロストウのテイク・オフはこの3つの要素の何れに関しているのかきわめて不明確だ。ロストウにかぎらず、一般にこの会議では経済のメカニズム分析への関心がうすいという印象をうける。どうも理論家と歴史家は「友人」になれるのがせいぜいでそれ以上は無理だ、とソローはいきっている。

さて私の印象について2つのことを簡単にかいてこの紹介をしめくりたい。第1ははじめに述べた問題について本書がどのような答を与えているかという点である。参加した役者に不足はない。報告・討論の視野も十分広い。組織化においてもっと集中的たりえたという不満はあるものの、現在可能な範囲でまずかなり徹底した討議がつくされたとみる。その結論はロストウのテイク・オフならびにその関連概念(もちろん Pre-conditions

および持続的成長を含む)は現在のところわれわれにとって確立された共有財産とすることはできない、というにあると私は考える。クズネッツは「近代的成長の初期的局面」というより弾力的な概念を提唱している。これは人々にアピールすること少いがしかし遙かに無理のない問題の設定を可能にする。ロストウはわれわれの現在の知識の不十分にも拘らず学問的リスクをおかしすぎている、というこの老大家の意見に私は賛成である。にもかかわらずロストウ理論はなお飛行をつづけるであろう、と私はおもう。

もう1つは日本の事情についてだ。新しい理論や概念の輸入と伝播の驚くべく早い国だ。ロストウ体系も例外ではなかった。だがしかし何人が真に日本の歴史的経験と対決させて徹底的な検討を加えただろうか。今日までのところ肯定も否定もともに上すべりの評論の域をでていない、といっっては過言であろうか。ロストウ体系批判についての本書の読み方はおそらく人によって著しくちがうであろう。私の紹介はむしろ否定的偏向にすぎているかもしれない。しかし私はロストウ体系の真の批判は自ら独自の体系を確立した人のみがよくなしうる、ということ承知しているつもりである。借りものの知識の寄せ集めで刃の立つていものではない。歴史家と理論家がせめて「友人」になるようにこの本が日本で役立つことを望む。

〔大川一司〕

ウィリアム・レットウィン

『科学としての経済学の起源』

William Letwin, *The Origins of Scientific Economics. English Economic Thought 1660-1776.* London, Methuen & Co., 1963, pp. 326.

本書は、その副題からも察せられるように、1776年に出版された『国富論』においてその絶頂を見出すところの、17・8世紀のイギリス経済思想史である。しかし本書の著者レットウィンはこの期の経済学者たちの思想や理論をただ要約して時代的に羅列するというような月並みな方法には満足しないで、『国富論』を新しい学問体系——科学としての経済学——の生誕と考えた上で、これが出現するまでに、17・8世紀のすぐれた少数の人々が如何にして新しい科学としての経済学の構築に努力したかを分析しようとする。本書が『科学としての経済学の起源』と題せられているのもこのゆえであろう。

本書は3部(pp. 3-228)と附録(pp. 231-300)から構成

されている。第1部は旧型(The Old Style)と題せられてチャイルド(Sir Josiah Child)とバーボン(Nicholas Barbon)がとりあげられ、第2部は新型(The New Style)と題せられて17世紀における科学の状況一般と客観性がまず論ぜられた後、コリンズ(John Collins), ペティ(Sir William Petty), ロック(John Locke), ノース(Sir Dudley North)の4人がとりあげられる。遺産(The Legacy)と題する第3部では、18世紀に入ってからより後、ペティ、ロック、ノースの影響がどのような仕方ですミス(Adam Smith)の著作に体现されるに至るかの経過が論ぜられている。

以上のような編別構成からして本書の圧巻が第2部であることはいうまでもないが(そしてこのことはまた各部にさかれたページ数[Part I-73p, Part II-126p, Part III-22p.]によっても証される), 以下順次各部の内容を紹介しておこう。

第1部第1章はチャイルドにあてられているが、著者によれば、チャイルドは自由放任の弁護者として時にはスミスの早い先駆者と目されることがあるけれども、「かれの見地は全体としてみればスミスの政策や理論とは根本的に異っていた」(p. 41)とされる。「チャイルドの方法は一般原理から特殊政策に論及するのではなくて、むしろ一定の方策が過去において有効であったとすればそれらは将来においても等しく好結果をもたらすだろうと主張することにあつた」(p. 10)のであるから、要するに「チャイルドはなんら経済諸関係の体系的分析をなしたわけではないのであって、科学としての経済学の発展上でのかれの影響は、かりにあるとしても、それは極めてあいまいであろう」(p. 46)。しかし「チャイルドの著作が体系を欠いているといつても、それはかれが非理性的であったというわけではない。欠陥は心的態度にあるのではなくて方法にあつた」とされる。それにもかかわらず「かれが経済思想史上で大きな興味の対象となるのは、最初の科学的経済学者たちによって取って代わられる旧型のすぐれた経済学者の典型であつたからである」(p. 47)。

第2章ではバーボンが登場する。著者はバーボンの『貿易論』を目して、内容目次の外観は秩序整然としていてプランはすぐれているけれども、その手法には次のような欠陥があるとみる。第1にかれは分析に代えて理論的に無内容な定義や分類に頼っていること(pp. 56-57), 第2に『貿易論』の各部分は論理的一貫性を欠くこと(pp. 57-58)。ところでこれらの点を等閑に附して政策的帰結(①最大の労働を雇傭するトレードが最も望ましい, ②国際貿易は自由にまかざるべきである, ③利子率

は法律によって引下げらるべきである)をみても、こうした「政策的帰結は経済理論の究極的發展上では取るに足りない」(p. 60)。純粹理論に対するバーボンの貢献の方がまだしも興味があるが、価値論では使用価値と交換価値の価値矛盾の問題は解決されてはいず、利子論でもシュンペーターの推奨には過剰解釈の感がある(cf. pp. 60-62)。もう1つの著作たる『新貨幣輕鑄論』はかれの経済学の著作中では「最良のもの」であるが、これとても「理論構築の領域でよりはむしろ具体的分析の領域での労作」(p. 74)であつて、「旧型の経済学的論証をその極限までおし進めたものであるにしても、そうすることによってその限界の何たるかを示した」(p. 75)にすぎないとしている。

第2部第3章ではまず経済学が宗教的倫理的考慮から独立した学問として出現するためには経済問題に対する神学的宣言の權威の衰退という事態が先行しなければならなかつた事情が述べられた後(cf. pp. 81-82), 「経済学はイギリス諸大学外で、しかも大学の祝福を受けることなしに生れた」事情が説明される(cf. pp. 83-85)。中世哲学によればトレードという営みは本質的には食欲の罪を犯すものと目せられていたから、こうした伝統下にあつた17世紀においてかかる営みを論ずる場合には、たいてい匿名という手段が用いられざるをえなかつた(cf. pp. 87-91)。ところでこの場合、世人を納得させる最良の方法は「私益と公益とは普通矛盾するものではない」ということを論証することであつた。マンやバーボンはこの方法を採用した。しかし世人をしてよりよく納得せしめる方法は客観性を論証することであつた。それは、第1には何人も疑いえないような若干の基本原理を定立してこれを結論と連結させる演繹法であり、デカルトのこの方法を採用したのがノースであつた(cf. p. 97)。ところがもう1つの科学的方法はベーコンによって主張された帰納的推理の方法であつて、これを採用したのがコリンズとペティであつた(cf. p. 98)。そして最後に今1つの要素はロックの採つた、道徳・政治哲学の伝統から経済思想を切り離そうとする努力であつた(cf. p. 98)。

かくて第4章ではコリンズがとりあげられる。「経済問題に関するコリンズの既刊書のみから判断すれば、かれは経済思想史の上では特筆されるに値しないであろう」が、かれの思考方法全般に着目してみれば、コリンズこそ「ペティが『政治算術』と名付けるところの、経済学の部門の目的に対して最も明瞭な洞察を与えた」(p. 112)のであつた。

次いで第5章でペティが登場する。著者によれば、

「ペティこそ 1750 年以前に存在した第 1 級の最上の経済理論家としてさらに高い名声を博するに値する」(p. 114)。ペティの『政治算術』に盛られた「数・重量・尺度」という算術的手法は正にノースの演繹的推理に匹敵するものである (cf. p. 137)。しかし『政治算術』にもましてすぐれた著作はかれの『租税貢納論』である。これは「当時のモデル的著作」であるが、その理由は「その内的統一性」にある。そしてこの点にこそこの著作が「科学的著作」と称されるゆえんがある。もちろん「分析原理そのものは近代の経済理論に照してみると部分的に間違っただけである」(p. 143)。例えば価格決定に際しての需要の役割の無視、農地又は鉱山の各区の生産力の差異の無視など (cf. p. 145)。しかし「1 つの著作をして科学的たらしめるものはその原理の究極的正しさ」ではない。この場合著者がこの著作を「科学的と定義するのはその分析の正しさではなくて、分析の方法なのである」(cf. p. 143)。そして『租税貢納論』はこの点において経済思想の発展に対して「最大の貢献」をなしていると著者は論結している。

第 6 章ではロックが登場する。著者によれば、「道徳的知識と技術的知識の区別はつけがたいものである」が、「科学的見地からするとこの区別は絶対に必要である」。もちろんこうした区別の兆候はすでに 17 世紀中に一部はカルペパーにみられ、チャイルドもまたこれを踏襲したが、ロックは経済行為を科学的に取扱うという至極困難な問題と取りくんだ。かれは道徳的政治的な問題を「自然法」の観点からとらえようとした。そしてかれは「自然利子率」の概念と 1 国における一定の必要貨幣量の概念に想到した (cf. pp. 160-161)。ロックにおいては客観性と利害の中立性は外的強制からではなくて生得の思索習慣から生じた」(p. 162) のである。かれの『利子引下げおよび貨幣価値引上げの結果に関する若干の考察』は「技術的分析の観点からすると、過度に広い仮定と時折りの論理的飛躍」がみられるけれども、「当時の経済学文献中では非凡な分析的性格をもつもの」であって、「そのような方法はこれまで価格および資本の問題には一度も適用されなかった」点で著者はロックを高く評価する。そして、経済学に自然法の理論を導入した点では、化学に対するボイルの法則、物理学に対するニュートンの法則にも比肩しようと論結している (cf. pp. 177-178)。

第 2 部の最終章はノースにあてられている。著者は、ノースこそは「経済理論の歴史における最初の十分な均衡分析」を提供した商人であり、その唯一の著作たる『交易論』は短編で簡潔でこそあれ、「当時においては

比類まれな理論的構造をもち、17 世紀の経済思想の最高峰に位する」(p. 198) とまで激賞し、「ロックの自然法の一般理論が少くとも僅かの制約された範囲で、経済的自由の諸結果を道徳的に是認するための根拠を提出していたのに対して、ノースの理論構造は何らそのような原理を含まない」(p. 199) ところの徹底した自由放任論であったとしている。かくてノースは「純粹理論家が純粹思索の衝動にかられて到達したと同じ科学的理論を考案」しながら、『交易論』が出版後直ちに姿を消したという事情に災いされてついに経済理論の生誕日を劃するには至らなかった (cf. p. 204)。

第 3 部遺産ではまずマッシイとカンティロンが論ぜられ、かれらを通じてペティ、ロック、ノースの影響が継承されると共に、17・8 世紀の経済学者たちの努力が結局はすべてスミスによって『国富論』において集大成されるに至る事情が論ぜられる。

附録に附された 5 論稿は学史研究者にとってはいずれも傾聴に値する貴重な資料といえるであろう。

わが国においてもペティ、ロックに関するすぐれた研究が続々と出版されつつある現在、レットウィンのこの新著は経済学史の研究者にはこよなき贈物となるであろう。
〔久保芳和〕

O・ルカーシほか編

『投入産出表——その作成と利用』

Input-output Tables, their Compilation and Use. Ed. by O. Lukács, Gy. Cukor, P. Havas and Z. Román. Tr. by L. Várady. Budapest, Akadémiai Kiadó, 1962, pp. 292.

本書は、1961 年 5 月 1 日から 5 日にわたってブタペストで開かれたハンガリー中央統計局および科学アカデミー主催の統計学国際会議の「投入産出表の作成と利用にかんする諸問題」部門における報告と討論をまとめたものである。この会議にはほかに「生活水準の測定と分析にかんする諸問題」部門も含まれているが、この部門の討論は本書にはおさめられていない。この国際会議は、社会主義圏における各国の投入産出表の経験を交流させることを主要なねらいとしているが、ハンガリーで 109 部門という大規模な投入産出表が作成された直後に開かれている関係から、主としてハンガリーの経験がこの会議の中心におかれている。ソ連のエイジェリマンをはじめ、ポーランド、東ドイツ、ブルガリア、チェコ、イギ